
ある子ども達のためのサンタクロース

苦汁ロメオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある子ども達のためのサンタクロース

【Nコード】

N5885P

【作者名】

苦汁ロメオ

【あらすじ】

双子の弟が家出した。その理由を、僕以外の家族は全員知っている。クリスマスの夜に戻ってきた弟は家出の理由を聞かせてくれるが、僕はどうにも腑に落ちない。そんな中、ある古いノートを見つけた僕は、そこに書かれた家族の真実を知ってしまう。(400字詰め原稿用紙換算約88枚)

上 弟と僕

上 僕と弟

十六歳の誕生日の丁度前日、双子の弟が家出した。ご丁寧に置手紙つきだ。

『しばらく家をでます。戻らないかも知れません』

その日の朝、僕はそんなことも知らずに学校へ行く仕度でばたかしていた一方で、母さんは弟が起きてこないことに業を煮やして部屋まで様子を見に行った。弟はいつも僕より先に目を覚まし、早々に仕度を済ませるとコーヒーを一服するのが常だったので、これはまあ珍しいことだ。

弟の部屋の中には誰もいなかった。机の上には置手紙がひとつ。母さんはそれで弟が家出したことを知り、それを父さんに告げたが、僕には何も言わなかった。「遅れるから先に学校へ行け」と言われただけ。僕は何も知らぬまま学校へ向かい、事情を知ったのは、家に帰った午後七時すぎのことだった。家には弟も父さんもおらず、母さんが暗く真剣な顔をして、弟の置手紙を見せてくれた。

なんで朝のうちに教えてくれなかったのかと訪ねると、出来れば夜までに連れ戻そうとしたからだという。今も父さんが心当たりを探し回っているらしい。心当たりがあるのと訪ねると、親戚の家などど答えた。僕自身は家出をしたことがないので良く分からないが、そういう時は親戚の家よりも友達の家に行くのが普通じゃないだろうか。僕と弟は同じ学校へ通っているので、共通の友人も多い。僕

は僕で心当たりに携帯で連絡してみたが、手がかりは何もない。弟の携帯はというと、部屋に残されたままだった。

弟が家出する理由に心当たりは無い。僕達は双子の割に似ていないが、それでも互いに腹を割って話せる関係である。互いの好きな人まで知っている。僕達は双子だが、幸い女性の好みは似なかったとみえ、僕は同じクラスの女の子が、弟は彼の所属する吹奏楽部の先輩がそれぞれ好きだと明かしあった。あいつと昨晚最後に顔をあわせた時だって、その話をしていたのだ。確かにその時も悩んでいるとは言っていたが、恋愛の悩みで家出なんかするものか。吹奏楽部の友人を経由して、その先輩にも弟のことを訪ねてみたが、案の定なにもわからずだ。

昨日の夜……弟と先の話をしたあと、部活で疲れていた僕は十時になるとすぐに寝てしまった。父さんと母さんは多分もう少しくらいは起きていただろうが、それでも十二時前後には寝るのが習慣だ。寝静まった深夜、弟が家出する理由はなんだ？ なにか僕の知らない悩みを抱えていたのか？ 考えてみたがわからなかった。

「大丈夫、お父さんがなんとかしてくれるから」

母さんはそういつているが、目には光るものが混ざっている。

弟は優秀な奴だ。物心ついたところから、小学校でも中学校でも、成績は常にトップだったといっている。余談だが、奴がトップじゃない時は、代わりに僕がトップに立っていた。誤解のないようにいっておくが、普段の僕の成績はあまり良くない。下から数えたほうが早いくらいである。その時は偶々がんばったというだけだ。反対に、弟はいつだって優秀だった。試験の成績も一位か二位のどちらかしかないくらいだ。僕には到底まねできない。

ルックスは奴の方が数段良い。これは毎年のバレンタインデーできちんと証明されている。背も向こうの方がいくらか高い。双子だけれどびっくりするくらい似てないと、僕らはときどき口にする。父は「個性が強いんだ」と良く分からない理屈を言っては笑う。

自分でいうのもなんだが、僕達は家族仲が良いはずだ。両親は僕

達に優しくしてくれるし、僕達も出来るだけそれを同じ気持ちで返そうとしている。弟も僕も、家族に対して強い不満を口にしたことはない。心のうちにも持っていないと思っていた。だけど、弟はそうではなかったのだろうか。

「手紙ってこれだけだったの？」

僕は置手紙を手にしながら、母さんにそう聞いていた。

「そう、それだけ」

母さんはそういった。

で、嘘だなって気付いた。

母さんは嘘をつくとき、首が少しだけ左寄りに傾く。ほんと、毎日顔をあわせてなきゃ気付かないような癖だ。僕はこうして毎日顔をあわせているから、たった今微かに首が傾いたのにも気がつくことができた。

僕が母さんのその癖に気付いたのは、ずっと昔、小さい頃のクリスマススの時期のことだ。きっかけはほんのたわいも無い会話からである。

「サンタさんって本当にいるの？」

「いるわよ。いい子にしてたらね」

「でも、お父さんがサンタさんだってみんな言ってるよ」

「そんなわけじゃない」

そこで首が傾いた。で、その癖に気付いてしまった。不思議な話だが、僕はそれが嘘だとすぐに気付いたし、それを示す証拠として、その癖があるのだということも知ってしまった。子ども特有の嘘への敏感さが僕にそうだと悟らせたのかも知れない。

それ以来、母さんの首が左に傾くのを、長年の間に数える程度ではあるが見てきた。僕はそれを特に指摘せず、弟にその癖を教えることもなく、ただ、こういう時に大事なことを騙されずに知るため、その癖を心のうちにとどめておいた。

母さんがここで嘘をつくということは即ち、弟は他にも何か手紙を残していたということになる。

それを、母さんは……そして父さんも、隠そうとしている。

しばらく家を出ます。戻らないかも知れません。

その理由を、両親はきっと知っているのだ。

僕は部屋に戻り、ベッドの上に横になった。いつもなら好きなあの子のことをひっそりと想っているような時間帯だが、今日は弟の顔が目につく。僕は似ていない双子だけれど、あいつの考えは手に取るように分かっているつもりだ。例えば、今はこうして家出の理由がわからないとしても、あいつの気持ちになって考えていけばきつと、兄である僕にはその答えがわかるような気がする。

例えば、僕達が実は双子じゃないとか。

これはまあ、昔から時々浮かんでいる考えだった。何度も繰り返すが、何しろ僕らは似ていない。弟は目が大きく顔もしゅんとして背も高い正統派な美形。対して僕は、細目だし、髪質も癖がかっているし、背も低い。声も全然違う。あんまり似ていないんで、冗談まじりで「実は血が繋がってないんだ」っていうのは最早定番のギャグみたいになってきている。

でもそれが冗談ではなく、弟は何かの拍子に、本当に血が繋がっていない証拠を見つけてしまったのだとしたら？

あの優等生の弟が突発的に家出するようなことだ。父と母が僕に理由を告げず、嘘までついて隠すようなことだ。昔から、そんなこともあるかもなんて想像していたことだ。

まあ、何だかんだでそこまでは事実かもしれない。でも、仮にそれを知って僕達はどうするだろうか。僕はずっと想像してきた。二十歳になったその日、両親が僕達にこう告げるのだ。「実は、お前たちは俺達と血が繋がっていないんだ」。なんとなくだけど、いかそう言われるような気がしていた。世の中にはそんなドラマや漫画がわんさか流通している。もしかしたらこれは馬鹿馬鹿しい想像だけど、一応の覚悟はしている。でも、だからってたぶん何も変わらない。父さんも母さんも弟も、これまで十六年間ともに暮らしてきた。血が繋がって無くても、これ以外の家族なんて考えられ

ない。いつか僕達も結婚して、家族が増えることがあるかも知れないが、今いるこの四人が壊れることは絶対にない。

と、僕は思う。

弟はこう書いている。

戻らないかも知れません。

ということは、大小は別として少なくとも戻る意志があるってことだ。

そう、仮に僕が、弟の立場だったとしよう。

両親との血が繋がっていない証拠をみつける。覚悟はしていたが、ショックを受ける。自分の出生の真実を知るため、家をでる。本当の生まれた場所へ……。

なくはない。なくはないが、これはあまりにも僕達が血の繋がらない家族だという前提に囚われている。実際のところはそれがどうだか分からないのだ。でも、母さんも父さんも本当の理由を知った上でそれを僕に隠している……。

覚悟は出来ていたはずだが、段々とその考えが強迫観念のように僕にのしかかってきている。本当にそれが真実だとしたら、覚悟ができていようがなかろうが、弟のように家出してしまうものなのかもしれない。そしてまたいつのまにか、弟が家出した理由よりも家族の真実が何かという恐れに囚われてしまっている。母さんは首を傾げた。今、改めて母さんに聞いたらどうなる？

「僕達は血が繋がっていないの？」

母さんは、首を傾げるか？

僕はベッドから体を起こした。頭がもやもやする。大事なのは、弟が今どこへ行ったのかだ。こめかみの辺りが暑くなっているのを感じる。僕は頭を冷やそうと窓を開けた。十二月の風は、一瞬で僕の体を冷やした。外は吹雪だ。せめて暖かい場所にいてくれよと、弟へ念を送る。向かいの家にちよつとしたクリスマスツリーが飾られていた。雪が積もって真っ白だ。

僕は窓を閉め、音を立てないように注意して部屋から出た。そし

て尚も音を立てないように、こっそりと弟の部屋へ侵入する。いつもは堂々と入っていくのに、中に誰もいないと分かっていてこっそりするというのも奇妙なものだ。電気をつけてみても、中の様子はいつもどおり。弟の好きなロックバンドのポスターだとかギターが置かれている。僕はそっち方面にはまるで疎いため、それがなんていうバンドでなんていうギターかも分からない。中学時代は同じバスケット部に所属していた僕達だったが、弟はギターを手に入れるとすぐに退部してしまった。このギターは父さんの昔の知り合いだという人から譲り受けたものだそうで、一本のギターだが二人で仲良く使いなさいとのことだった。僕はあつという間に飽きてしまい、弟はのめりこんでいった。

ギターから注意をそらし、机の上を見る。無造作に携帯が置かれていた。折りたたみ式のもので、何かの着信があつたことを告げるライトがオレンジ色に点灯している。それを手に取り、画面を開いてみた。人の携帯を見ることは正直気が進まないのだが、こいつを残したまま家出をしたということに何か引っかかりを感じなくも無い。GPSが何かで探索されるのを警戒しているのかもしれないが、いまいちピンとこない。何しろGPS機能なんて使ったことが無い。実用性がよくわからん。画面には不在着信が数件。誰からのものか見ようとボタンを押すと、セキュリティのためのロックがかけられていた。四桁のパスワードを入力しないと解除されないやつだ。ためしに僕達の誕生日を入力してみたが、ロックは解除されなかった。仕方が無い。僕に解けるようなパスワードじゃ意味が無いだろう。

机の引き出しに手をかける。弟のことはなんでも知っているつもりだが、なんだか不安に苛まれる。もしも僕の知らない弟の秘密、例えば、性癖を表すなにかが出てきたらどうしよう……などと馬鹿げた心配をする。そもそも、これを開いたところで、弟の行き先がわかるとは思えない。僕は引き出しにかけた手を引っ込めた。落ち着け、これじゃただの家荒らしだ。

果たして、なにもしていないというのに僕はなんだか疲れてしま

い、弟のベッドに倒れこんだ。何もしていないというのに、僕は弟のことで知らないことはいくらでもあるというのが良く分かった。現にもう六つもそれが見つかっている。

なぜ家出したか。なぜ音楽がすきなのか。携帯の暗証番号はなんなのか。机の中にはなにがはいっているのか。いまだどこにいるのか。血は繋がっているのか。考えればもっとあるかも知れない。

弟の行き先を本当に求めるのなら、僕は迷わず引き出しを開けるべきなのだろう。たとえそこになにもないのならば、携帯の暗証番号を解けばいい。弟が好きな吹奏楽部の先輩の誕生日だとか、候補はいくらでもある。もっと決定的な心当たりもないではない。でも、僕はそうする気になれなかった。少なくとも今は。

僕は結局なにも成すことなく自室へ戻り、やはり何をするでもなく自分のベッドに横になった。そして、そのまま眠り、眠っている最中に日付は変わる。

僕は十六歳になった。

弟も十六歳になっているだろうか？

クリスマスイブの夜に弟は帰ってきた。あれから丸四日経っている。父さんもそれと同じだけ家を空け、その間ずっと弟を探していたそうだ。外は猛吹雪で、ロマンチックにホワイトクリスマスなんて呼べるような代物とはとてもいえない。二人とも肩や頭に雪が積もっていて、見ているだけで寒そうだ。

母さんは玄関先で弟を出迎えたかと思うと、そのまま抱きついて泣き始めた。これには僕もびっくりだ。なにかのテレビドラマでも見ているんじゃないかと思った。それに伴い、僕の思考回路も若干ドラマチックなものになっていく。弟に抱きつく母さんを見ていると、やっぱり僕達兄弟は血が繋がってないんじゃないかという思いに囚われる。スポットライトが悲劇的に僕を包み込むようだ。母さんに抱きつかれたままの状態で、弟の視線がこちらを向いた。奴は薄い笑みを浮かべたが、その目は深く真剣だ。

ああ、あれはそうだな。あの目は、僕の知らないことを知っている目だ。

その後はみんなで食卓を囲んで、クリスマスらしく七面鳥を食べた。喰いながら、弟に「なんで家出した？」と聞いてみると、代わりに父さんが「あとでそれは教えるよ」と答える。弟はただ黙って神妙な顔をしてやがる。いっそ「兄貴には内緒だ」くらい言われて、僕はむっとしつつもほっとするという筋書きのほうが良かったかも知れない。これではただ不安の先伸ばしである。何にせよ、後になつたら僕も何かを知るわけだ。

食器が片付いた後、改めて父さんと母さんが僕に向かい、こういつた。

「お前たち兄弟は、実は私達の本当ののではない。ある施設から引き取ったんだ。お前たちの誕生日は偶々一緒だったが、親はそれぞれにいる。私達はもとの出来ない夫婦で、あるクリスマスの夜にお前たちを正式に養子として迎え入れたんだ。このことは、出来れば秘密にしておくつもりだった。いつか大人になった時に告げることも考えてはいた。正直まだ迷っていたんだ。少なくとも、今はその時じゃないと思っていた。だが、今となつてはお前にだけ隠しておくわけにもいかん。いままで隠していてすまん」

大体、こんな説明だった。

覚悟していたこととはいえ、ショックはショックだったね。だけれど、それを聞いたからといって「よし僕も家出しよう」という気にはならなかった。やっぱり父さんと母さんは父さんと母さんだった。ってことは、僕はこの事態をすんなり受け入れたってことだ。

これで大団円だ。

そうだろ？

そうかな？

勿論、まだわからないことがある。弟はなんで家族の秘密を知ったのかってね。その夜それを問いただしてみると、奴は家出して帰

つてきたばかりとは思えないような爽やかさでこう言った。

「俺達がいた施設の出身だっていう人がいたんだ」

「へえ？」

「その人は、俺達兄弟のことを一方的に知っていたらしい。俺たちとはまるで違う境遇で育ったそうだ。……ありていにいえば、不幸な生き方をしてきている。だから、俺達兄弟のことを逆恨みしていた。それで、本当のことを俺に教えたってわけだ」

「ふうん？」

「俺はショックを受けて、家出したんだよ」

「どこへだ」

弟は言葉に詰まったようだった。しかし、とうとう観念したようにこういった。

「俺達の生まれた施設だよ」

ちよつと変だな、と思う。それは十分予測できる答えだ。なんでその答えを言い淀む必要があったのだろう。

「どんな場所だった？」

「中には入ってないんだ。その前に、父さんに見つかった。……っていうか、先回りされてたよ」

「ふうん……。なあ、お前に本当のことを教えたっていう、その人は誰なんだ？」

「わからない」

そんな会話をしながらも、弟の探るような視線が気になって仕方ない。やっぱり何かがおかしいのだ。

「なあ、単刀直入に聞くけどさ。お前はなんで家出したんだ？」

「それは、本当のことを知ったショックだよ」

「本当に？ お前だって、僕達の血は繋がってないかも知れないなんて昔から言ってただろ。そりゃあ、僕だってさっきの話を聞いたらショックだったさ。でも、あれだけじゃわからないんだ。衝動的に家出して、僕達の生まれた施設まで行く理由がさ」

「そうかな」

「そうだよ。衝動的に家出までならわからなくもない。でも……」
「どうなるかなんて、わからないもんだろ？」

「お前さ、なんか他にも知ってることあるんじゃないの」
「知らないよ」

と、弟はいったので、やっぱりこれも嘘だと分かった。
こいつにも、嘘をつくときの癖がある。

これ以上、追求するべきなのかどうか。まだ何かを隠しているのだとしたら、僕はそれを知るべきなのか？　僕がどうしたものか迷っている、弟はふと調子を変え、明るい声で次のように言う。

「兄貴、俺のいない間に部屋を漁ったりしてないだろうな」

「漁ろうかとは思ったけど漁ってはいないよ」

「そうか」

弟はほっとしたようだった。

「なんか変なもん隠してんのか。またエロDVDか」

「ちげーよ」

弟はそう言って笑う。嘘はついてない。

「っていうかよー」と弟は疲れた声を出す。「クリスマスイブなのに、結局いっしょにいるのが兄貴とか、あほらしー」

「お前が家出なんかするからだ。四日もあればお前の好きな例の先輩とも仲良くなれたかもしれないのに」

「ほんとだよ」弟はため息をついた。僕もため息をついた。弟と一緒にクリスマスイブ。あほらしい。

「兄貴はさ」と、弟が言う。「サンタクロースはいると思う？」

「いないだろ」

「だよね」

「お前がサンタクロースになって先輩の家にいけばいいじゃん。あつ、それ面白いな。おい、今からでも間に合うぞ」

「無茶言うなよ、隣町だぞ。この大雪だぞ。兄貴の好きな子は家が近いんだから、兄貴がいけよ」

「……お前がいない四日の間に、彼氏がいるってことを知ったよ」

「……ご愁傷様」

「おうよ」

でも別に悲しくは無い。僕はそれよりも気になって仕方が無い。ただこうして馬鹿話をしているだけのはずなのに、何か奇妙な真実が今にも顔を出そうともがいているような気がする。だとしたらどこからだ、どこから現れる？

「メリークリスマス」

「メリークリスマス、ちくしょーめ」

翌日、クリスマスの夜。家に帰ると弟はまだおらず、母さんが僕を出迎えてくれた。僕は母さんと軽く会話するとすぐ二階へ上がり、自分の部屋に荷物を置くと、静かに弟の部屋へ侵入する。そして、弟の秘密のエロ本が隠されているプラモデルの箱を開けた。これは僕と弟だけが知っている秘密だ。一番上にはなんとかつていう雑誌があり、なんとかつていうA V女優がヌードを披露している。それを退かして中を漁ると、古い大学ノートが一冊、見つかった。僕はそれをパラパラと捲る。何か書かれているが、まだ文字に目は通さない。誰が書いたかは、ぱっと見ただけでは分からなかった。弟の字ではない。中身を読めば分かるかも知れない。僕はそれを小脇に抱えると、プラモデルの箱を元に戻し、自分の部屋へと戻った。弟がまだ帰ってきていないことを確認すると、僕は改めてノートを開き、その中身を読み始めた。

それを最後まで読み終えると、もういちど最初のページに戻り、最初の方だけ読み返したが、やがてそれを閉じると、どうしたらいいのかまるで分からなくなった。階下から弟が帰ってきた音がする。奴は階段をのぼり、自分の部屋へ入り、何やらごそごそとしたあと、間もなく僕の部屋へノックをして入ってきた。

お互い、このノートのことを知るもの同士だ。僕たちは目配せあった。

「見たんだね」と僕にいう。

「見たよ」と僕はこたえた。

中 ノート（私と妻）

中 ノート（私と妻）

年の瀬である。

隣の部屋では、妻が息子達のおしめを変えている最中のようなのだ。名前はまだ決まっていらない。二人でいくつもの名前を提案しては、あれではないこれではないと言い合っている。私達夫婦の命名センスはどうやら大分違うもののように、どうにも衝突しあう運命のようだが、不快なものではない。それどころか、互いに可笑しいねと言って笑いあっている。出来るなら、年が変わる前には決めたいところであるが、もしも決まっても、このノートにそれを記すことはないだろう。

大事なのは、私達は四人の家族になったということだ。

今からここに書き記すことは、事実の記録であると同時に、これから書き記すその事実を我が子に対して永遠に封印しようという決意の表れでもある。私が妻と出会ってから、ついこの間のクリスマスまでの間に見聞きした出来事は、いずれも現実である。そこで知った恐ろしい事実は、これから先も、私にとつての終わらない悪夢として続いていくのだろう。だが、少なくとも、私達「家族」はそれらと訣別する。この文章を書き終えることで、私は私なりの清算を果たし、その後は家族を支えるという責任においてのみ尽力していく心積もりである。これはその意思表示でもある。

……とはいえ、いずれはこの文章が誰かの目に触れることがあるかもしれない。仮にこれが息子達の目に触れることを想像すると、この書く手も止まってしまうようになる。だがやめるわけにはいか

ない。せめてもの抵抗として、ここには我が家族を初めとして、一切の実名を伏せての表記になることを予め承しておいて頂きたい。

その上で、簡潔な自己紹介をしよう。元々私は東京の安アパートで暮らす一介の雑誌記者にすぎなかった。例によって具体的な雑誌名や所属は伏せる。世に潜む都市伝説や悪霊などの、いわゆるオカルト系の記事をメインに書いていた。あまり人に理解される職業ではないように思う。私自身、その手の話は一切信じない性質であった。それでも時には地下鉄の悪霊を探し、姿の见えない殺人鬼をでっちあげ、終末の予言を囁し立てる。その全てを嘘だと思いながら書くのだから、小説を手がけるようなものだ。

妻との出会いは、そういった取材の最中でのことだった。その時の出来事は後述するが、私はただ単にガセ記事を書くために現地に赴いたはずが、恋に堕ちて東京へ戻り結婚するという予想外の結末となった。どんな悪霊が出てこようと、それ以上の予想外はあるまい。

そしてその出会いは同時に、本当の異常——あえて『異常』と表現させていただくが——それそのものとの邂逅の始まりでもあった。

同じ雑誌で、同じくオカルト担当をしている先輩がいた。彼は地下組織だとか秘密結社などといった、きな臭くも危険な香りがするネタが大好物で、実際にそういった場所へと潜入取材しては命からがら逃げ出すという経験を何度もしているという噂だった。いつか仕事中に命を落とすだろうと専らの評判である。先輩は何故そんな危険地帯が好きなのですかと聞いてみると、中へ入らねば膜は破れないものだという。これには、真実はその目で見てこそ価値があるのだという意味と、もうひとつ書き記すまでもないような下品な意味の両方がある。とにかく、先輩は中へ入りたがるのである。

その話を聞いた日（それは今年の秋頃の話で、私と妻はもう結婚して数年が経っていた）、私達は行きつけの酒場でくだを巻いていた。私がジン・ラムですっかり酔っ払った頃、先輩は突如神妙な顔

になり、タバコに火を着けながら、こんなことをいう。

「国家レベルの暗黒面をかぎつけたかも知れない」

先輩の台詞としては珍しくない部類なので、私は酔いの廻った頭で適当に頷いた。

「人身売買。現代の奴隷商人だ」

その手の話は、日夜様々な情報が耳に入る。その大半はガセであり、いまやそんなものに興味をもつのは編集部内でも先輩だけという現状だった。だが、一方で先輩はいつだって真剣だ。

「その組織が主に扱っているのは、幼いだ。」

一部の富裕層、それも特Aクラスの連中が、自分達の娯楽のためだけに設立したのさ。連中は遺伝子をいじくるだか、優秀な種を見つけるだかして、これまた特Aクラスの達を次々と生み出している。それらの達がどうなるか、わかるか？ うん、優秀な遺伝子だからな。成長すれば、身体能力も常人を遥かに超えるだろう。だから優秀なボディガードになる。なるほど、そのために作られた体ってわけだ。漫画みたいな話だな。生まれついてのボディガード、こいつはまだ幸せな方だ。中には、殺しのほうを専門にやらせる買い手もいる。幼い頃からそういう風に仕込まれれば、そりゃあ文句の付けようの無い完璧な殺人鬼の完成だろうな」

荒唐無稽な話だが、そういった不幸を背負う達の実在は容易に想像することが出来た。妻の件もある。だから、先輩が次に口にしたことも、容易に想像できた。

「まあそれだってまだ運がいいかもよ。そこで売られる大半の達は、玩具にされて一生を過ごし、飽きられたら棄てられる」

酒が一気にまずくなった。私は胸元からタバコの箱を取り出し、火をつけて吸い込む。やはりこれもまずい。先輩はというと、相変わらず豪快に酒を飲んでいいる。どうだい、この話は。いい酒のつまみだろ？ そういうことを言いたげな顔だ。

「不快ですよ」と私は言った。「金持ちだか国家だが知らないが、そんなことは許されないでしょうに」

「許されるかどうかは知るものか。そういうことがあるっていう話だ。達は生まれた時からそうなんだ。倫理観も持たない。案外苦しみを知ることなく死んでいくのかもよ」

その点についての議論をするつもりはなかった。ただ、妻のことを思い出していただけだ。

「また潜入取材ですか？」

「そのつもりさ」

「どうやって」

「顧客を装うよ」

その言葉どおり、先輩は早速現地へと赴き、そこで色々なものを見た。東京にいた私の元へは、先輩からの電話が現地から直接届いた。

「ちょっと分かったことがあってな。お前には伝えておこうと思っ
て」

「なんですか」

「俺が調査してる例の組織な。あれ、お前のカミさんがいた宗教団体と関わりがあるみたいだぜ」

妻と私との出会いは、前述したとおり、取材がきっかけである。

当時、雑誌では予知能力をテーマに特集を組むことが決まり、そのために私は北海道へと赴き、予知能力をもつと噂される女性への取材を敢行することが決まっていた。

その女性こそが、まさしく今の妻である。

北海道のE市は札幌から程近い小さな街だ。彼女はこの街のデパート内で経営されている書店の店員として働いていた。私は前もって取材の申し込みをとってあったが、とりあえず様子見のため、客を装って彼女に近づいた。適当な漫画本を一冊、手に携えて、彼女が立つカウンターに並ぶ。私の前ではジャケットを着た老人が何やら大量の本を買っており、それを丁寧な紙袋に包む彼女の姿があっ

た。自分の順番を待つふりをしながら彼女を観察する。年齢は二十歳だと聞いている。髪を後ろで縛っており、顔になった額や肌からは清潔な印象を受ける。自然に浮かんでいるような笑みは好感がもてるもので、要するに魅力的な女性として分類することができた。こんな見た目の女性が予知能力者だとは誰も思えない。

彼女の情報を編集部にリークしてきたのは、彼女の同僚であるTさんという三十歳の女性だった。私は前もってこのTさんから話を聞いており、その内容を要約すると以下のようなになる。

「彼女ったら最近はいったばかりのまあ見た目は可愛い子なんだけどね。時々妙なことを言うのよ。実はつい先日、この街ではバスの転倒事故があつてね。冬場だから、路面がツルツルすべるの、東京じゃあまりそういうことはないんでしょう？　酷いもんよ、あのバス、いつつもくねくねした道を通ってるから、いつかあんな事故も起きるんじゃないかって前から思ってたわ。

でもあの子はそれがいつ起きるか、正確に当ててみせたのよ。私はいつも仕事あがりに帰るときはそのバスで帰るんだけど――ほんと今思えばとんでもないことだわ――とにかく、その日もいつもどおりバス停の前に立って待ってたわ。そうしたら、あの子がいきなり現れてこういうのよ。『それに乗っちゃいけません』私はおとなしくそれを聞いたわ。そしたら、びっくりよ。その後あの事故でしょ？　彼女は本物の予知能力者だわ」

「いきなりバスに乗るなって言われて、それをおとなしく聞き入れたんですか？」私は少々腑に落ちなかったのでそう聞いてみた。

「そうよ。彼女はつまり――初めて見たときから只者じゃないと思ってたわ」そういつてTさんは豪快に笑った。

そんな会話を思い出しながら、改めて彼女の姿を見る。カウンターの向こうに立つ彼女は、魅力的ではあるが、特に只者ではないとも思えない。

前の老人が会計を済ませ、私の番になった。私が一歩近づき、カウンターの上に漫画本を置いたとき、彼女は目をあげ、私の顔を真

っ直ぐにみて、こう言った。

「初めまして。きつといらっしやると思ってましたわ」

それが彼女の第一声であった。はじめ愚かな私は、この書店での挨拶が特殊なのかと勘違いし、変な店だとおかしくすら思った。だが、よくよく考えてみれば、いまさつき彼女が対応していた老人に對してはそんな挨拶はしていなかったはずだ。いやそんな事は抜きにしたってただの書店にしてはおかしな挨拶だ。私はどのような反応をすればいいのやら分からなくなり、ただ黙って漫画本が紙袋に包まれるのを見守った。そして言われるがままに、提示された分だけの金額を彼女に渡し、漫画本を受け取る。

彼女は紙袋を差し出しながら「もうすぐ仕事も終わりますので、向こうの喫煙所で待っていてくださいね」と笑顔で私に告げた。私は呆けたように頷き、後ろの客に場所を明け渡した。

私は『向こうの喫煙所』で煙草に火をつけ、深く煙を吸い込んだ後に、「彼女は俺が喫煙者だってことにも気付いていたのだろうか」というまた新しい疑問をもった。相手に見えるように胸ポケットに忍ばせていたわけでもなし、私が喫煙者であるという情報は彼女が知るはずのないところだ。無論、ただ待ち合わせ場所として適当だったからここを選んだという可能性も十分にある。あるのだが、一度疑問に感じ出すと、どうも全てが見透かされているのではないかという疑いが頭をもたげはじめ、どうにも落ち着かない。

十分後、宣言どおりに彼女は喫煙所に現れた。

「改めまして」彼女は自己紹介をしてくれた。私も自己紹介を返す。また「知ってました」と言われるのではないかと思ったが、彼女はにこやかに頷いただけであった。

私は彼女に連れられ、デパートの外にある適当な喫茶店へと入った。その若いマスターは彼女に對して友好的な笑みを見せたが、私に對してはぎこちない表情で挨拶を飛ばしてくる。どうやらこの男は彼女に気があるらしく、同時に私を敵として認識したらしい。当時としてはとんだ誤解だが、確かに今では私の妻なのだから、彼

の敵意もまあ仕方が無いと今はいえる。マスターが惚れるのも無理からぬことだ。わが妻ながら、彼女は美しい。

「早速ですが」と、私は切り出す。「あなたの先ほどの言葉はどういう意味なんですか？ 一目見て、私が東京の記者だと分かったということですか？」

「一目見てわかりました」と彼女は言う。「もっと正確に言えば、見る前から分かっていました」

「予知能力で？」

「そうです」

「まさか」

「信じてないのですか？ そのために取材にいらっしゃったのでしょうか？」

「確かにその通りです。実は、先だってあなたの同僚のTさんにお話を伺いました」

私はとりあえず、Tさんから聞いた話をかいつまんで伝えた。

「まあ」と彼女は笑う。「おとなしく私の忠告に従ったですって。実際は中々苦労したのよ」

「やっぱりそうですか」

「ええ。私なんかまだ新人だから、生意気に意味のわからないことを言ってると思われませんでしたよ。でも、変に思われてもいいからとにかく必死で説得したんです。Tさんは激怒しながらも最後には了承してくれましたわ」

「そいつは良かった」

「そんなことはありません」と、彼女は強く言う。「あのバスが事故に遭うと知っていたいながら、私が救えたのはたった一人です。それだけ苦労してたった一人です。予知の発動が遅かったというのもあります。Tさんがバスに乗る予定のほんの十分前に知ったんですもの。だけど、もしも直接バス会社に連絡していれば……」

「きっと取り合っちゃくれませんよ」

「きっとそうでしょうね。でも、まだ何かできた気がするんです。」

もつと大勢が救えた気がするんです」

あのバス事故による死傷者は計十六名に及んでいる。内、幼いを含む五名が死亡していた。

「あなたは出来る限りのことをなさったと思いますよ」

私はそんなことを口にしながらも、まだ予知能力について信じたわけではなかった。自分の言葉ながら、なんて白々しいのだと思うと、心が寒くなる思いだったのを覚えている。

きまづい沈黙が走った。マスターの視線が入り混じって更に気まづい。私は姿勢をただし、改めて彼女に問うてみる。

「繰り返しになりますが、あなたは私の顔まで予知していたのですか？」

「そうです」

「しかし、予知能力というのはそこまで正確なものなのでしょうか。これはあくまで僕のイメージですが、『なにかが起るかもしれない』というところまでは抽象的に分かってても、『こんなことが具体的にこういうふうに起きる』というところまで分かるものなのでしょうか。つまり、僕の顔をまで予知できるというのは、いささか正確すぎやしませんか」

「その質問に答えをだすなら」そういつつ、彼女は何故かはにかむ。「それがいかに重要なことかで変わってきます。あなたがただの人ならば、私だって顔まではわかりません。まあ東京からやってきた記者さんだってことまでは分かるかも知れませんが、私はあなたが言うとおり、顔まで全て予知していたのですから」

「この取材があなたにとってそこまで重要だと？」

「いいえ、あなたが重要なのです」

再び沈黙。私は困惑する。これは一種の詐欺の手段ではないだろうか。彼女はお得意の予知能力を装って、男相手に「あなたは大切な人」だと告げる。綺麗な女にそういわれた男は、まあ大抵はおちるだろう。私はいままさにそのプロセスの中にいるのではないか……というような疑いをもったのである。

「あなたがそういった『異常なこと』を信じないということも知っていますわ」

その通り。私は初めからずっと疑っているし、記事にしても、彼女は偽者だと決め付けた上で書こうとしていたくらいだ。客を装って近づいたのも、「その女性は予知能力をもつとされていながら、客を装って近づいた私にも気がつくことができなかった」などという、主観で見ても横暴そのものないちゃもんをつけることが目的にあったからだ。いちゃもんだろうがなんだろうが、オカルト否定の材料になるのなら私は喜んでそれを駆使するだろう。

だが、それがいきなり崩された。そうならば必然、ここからは彼女のペースである。

「この手の話にはガセが多いのでね、慎重になっているだけですよ」
「勿論、それは理解していますわ。ただ、あなたにだけは理解してほしいの」

それを彼女は上目づかい気味に、少し目を潤ませながらいうものだから、私も世間一般の男同様、心の溶けるような気分になる。マスターには悪いがね。

後になれば全てわかることだが、彼女はこの時点で本当に全てを予知できていた。私達ふたりは、将来的に夫婦の関係になるのだということを。彼女にとってこれは、将来の夫と出会う初めての瞬間であり、運命の時だったのである。だからこそ、それほどまでに正確に予知ができたのである。世間に知られてはいけない過去を持ちながらも取材を受け入れたのも、全ては私に出会うためだった。だからこそ、私にだけは理解を求めたのだ。

妻は理解していたのだ。私こそが彼女の過去を受け入れられる数少ない一人であり、未来の我が子を助けられる唯一の存在であるということ。

彼女がその後、私に辛い過去を聞かせてくれたのは、そういった信頼と渴望があったからこそである。

ある宗教団体がある。東北のある山奥で、ひっそりと信者が集まっている小さな教団だ。私自身はそこに赴いたことがないが、前述した危険地帯好きの先輩が潜入取材を敢行した場所のひとつがここである。はつきり言って、今までやってきた取材の中でも最もヘビーだったと彼は言う。そこで行われていることについては、とてもじゃないがここに書くに耐えない。ただそこには大勢の達がいて、儀式と称される非道が行われているということだ。

妻は十歳までの年月をそこで生まれ育った。生まれつき予知能力を持つ妻は、そこで選ばれし巫女として奉られ、そしてが生めぬ体になった。

妻は人里離れた山奥で一生を終えるはずだった。虐げられながらも、教徒のためにその予知能力を使う日々。実の両親はその幹部でもあり、一際酷い虐待を加えていた。その全ては、真理を知るという目的のためだったそうだ（なんのことやらさっぱりである）。彼女はそれでも生きていた。

ある予知が彼女にはあった。クリスマスの夜、自分を助けに来る誰かが来るはずだと、ふいに彼女は悟ったのである。その宗教の戒律から見れば、クリスマスは異教の催しであり、当然十二月二十五日など、例年はただの何でもない日であったのは間違いない。外の世界を知らぬ彼女は、サンタクロースはおろか、クリスマスという言葉すら知らなかった可能性すらある。だが、それでも彼女ははっきりと予知できた。彼女はそれを心の内に秘め、サンタクロースの到来をただ静かに待った。彼女にとって、それだけが心の支えだったのである。

果たして、クリスマスの夜、サンタクロースは現れた。

鎖つきで閉じ込められていた彼女の前に、その男は立っていた。その男はまだ若く、真っ白な髭も生えていなかったし、帽子も被っていないかったが、服の色が真っ赤だったので、この男こそがサンタクロースだということはすぐに分かった。

サンタクロースは懷から何かの道具を取り出すと、彼女を繋ぐ鎖

を外そうとする。そうしながら、彼は小さな声で彼女に告げる。

「いいかい良く聞くんた。ここを出て裏手に回り森の中を真っ直ぐにいくと、私の……がそこで待っている。それが君を逃がしてくれるはずだ。いいかい、ここを出たら、振り返らずにそこへ向かうんだ」

「ありがとう、サンタさん。でも、私は本当に行ってもいいの？ここに残って神様にお祈りをしなくてもいいの？」

「神様はいちいちお祈りなんか聞いちゃいないよ。みんながいつべんにやるもんだから、雑音としか思っていないよ。それよか、君には未来が見えるんだろう？ 神様よりそれに従ってみたらどう」

彼女が見た未来は、はっきりとはしなかったが、少なくともこんな山奥で黙ってただ死んでいくようなものではなかったそうだ。

彼女は逃げ出した。真っ赤な若いサンタクロースはそこに留まり、彼女を見送った。それ以来、ふたりは再会していない。彼女は雪の降る森の中で、サンタが言った物を探し彷徨ったが、やがて気を失い、次に目覚めた時には病院のベッドの上に眠っていたということだ。目覚めた彼女が最初に見たものは、心配そうに顔を覗き込む見知らぬ夫婦。それが今の両親である。

その宗教団体はいまでも尚、東北の山奥で新たな巫女を奉り、存続している。

彼女が語ったその話について、私にはどういう判断も出来るものではない。ただ、妻がそう語った。だから私は受け止めた。夫としてはそれで十分なはずである。だが少なくとも、その時点では記者と取材相手という関係でしかなかった。

「興味深い話だとは思いますが、しかしなぜその話を私に？ そのことが記事になれば、あなたはその宗教団体とやらの生存やら居場所やらを気付かれてしまうとは思わなかったのですか」

「記事になってしまえばきっとそうでしょう。でも、あなたはきくと書きませんわ」

その通り。私はそんなことまで記事にするつもりはない。少なくとも、私はあくまで予知能力の取材に來ただけである。そんなカルト宗教に首をつっこみたいと思うほど、記者として優秀ではないのだ。思えば、その話について書くのはこのノートが初めてだ。とにかく、私はそのことを記事にせず、ただTさんから聞いた話や、レジでの出来事など、予知能力だけに焦点を絞った記事を仕上げた。

彼女が私のことをそこまで信用したのは、その予知能力があったからかもしれない。いくら強力な予知能力とはいえ、そこまで自分の未来に確固たる信頼が置けるものなのかどうかは、私には到底理解しがたい領域の話だ。だが、現実として私は書かなかったし、そして今では夫になっている。なぜか？ これについての説明は難しいが、抽象的な言い方でいいのならば、彼女の予知能力が私に呼応したからなのではないかと思うときがある。彼女の予知を現実にするために、私の存在はあるのではないかと、今でもふとそう思う瞬間はある。そしてそれはこれからも続いていくかも知れない。

彼女が語った言葉の中で、もうひとつ記事に書かなかったものがある。公開された記事の内容は、「バスの転倒事故で亡くなったしまった五名のことを今でも悔やんでいます。私の予知能力は、本来その五名のために存在するもののはずなのです。こういった経験は初めてではありません、私は、一人を救ったことよりも、亡くなった五名のことの悔しいのです」という彼女の言葉で締め括られている。だが、私だけが知る続きが存在する。

「私があなたに出会ったのも、そのためですわ。あなたに私の能力をお貸しします。そしてあなたが人を救うのです」

何を言っているのやら、どうもうまく飲み込めない。ただ一言こり返した。

「なぜ私が？」

「予知しましたから」

と彼女は笑った。

便利な能力である。

彼女が予知したからというわけではないが、私達はその後、本当に交際を始めるようになり、何度もいうように、夫婦の関係となった。だが、前述したように、彼女は子を産めぬ体である。

さてそれではそろそろ……私と妻の息子達について書くことになしようか。

下 ノート（私と息子達）

下 ノート（私と息子達）

「ちょっと分かったことがあってな。お前には伝えておこうと思つて」

「なんですか」

「俺が調査してる人身売買の組織な、あれは、お前のカミさんがいた宗教団体と関わりがあるぜ」

説明が必要だろう。結婚して数年、のない私達は、ともに東京で暮らしている。あれから妻には内緒で、その宗教団体についての調査を続けていた。その過程で先輩が潜入取材をしていたことも知ったのである。先輩には妻のことを隠しながら、それとなく情報を集めていたつもりだったのだが、さすが優秀なライターというべきか、彼は簡単にそれを看破してしまった。狼狽する私に彼は「心配すんな、身内の嫁を売ったりしねえよ」と言ってくれた。その約束はここ数年守られ続けているし、情報交換はいまでもなされている。

「詳しくお願いできますか」

「うん。前も言ったように、その組織では優秀なを純粹培養しているわけだな。一方、宗教団体は『選ばれたを』奉りあげようとしている。……あるいは、生贄にするためにもっと数が必要なのかもな」

「利害が一致するわけですね」

「そう、それに、実際に繋がりがあるような形跡もある。まあ裏をとったらまた連絡するよ」

そこで通話が切れた。突飛な話だと思われるだろうか？ しかし私にとってはここ数年、さんざん思い知らされてきた、これ以上ないくらいに現実的な話に聞こえる。勿論、このことを妻に告げたり

はしない。結局、その宗教団体を調べあげていった末にどうしようというのか、私は具体的な目的をなにも持っていなかった。ただ、何も知らない立場である自分への歯がゆさを感じていたにすぎない。それから数日たって、北海道から帰ってきた先輩と行きつけの喫茶店で待ち合わせをした。私がいつもの席に座り煙草を吸っている、先輩が店内に入ってくるのが見えた。手を挙げて名前を呼ぼうとして、驚いた。彼はなんと、六歳くらいの女の子をひとり連れていたのだ。呆然とする私を他所に、先輩は女の子の手を引いて、二人ならんで私の正面に座った。女の子は俯きがちのに野球帽を被っているで顔が良く分からないが、鼻筋や口元はとても整っているように見えた。

「娘さんですか？」

「まさか、例の組織にいた子だよ」

先輩はしれっとそう言い放ったので、背筋になにか寒いものが走るのを止められなかった。

「あなた、人身売買に加担したんですか」私は低い声でそう訪ねる。煙草の煙が喉に絡みつき、ちょっとした痛みがあった。

「そうじゃない」先輩は否定する。「あのままあそこにいても不幸になるだけだろ。向こうでこの子の顔を見た時に、見捨てられなくなったんだ。この子の目が、助けを求めている気がした。俺は逃げ出したかったが……見捨てられなかったんだ」

私は先輩の横でストローに口をつけてジュースを飲むその子をみた。真っ黒で長い髪の毛が帽子から流れ出している。先輩が買い与えたのか、こぎれいな服装だ。顔は相変わらず良く見えなかったが、私の観察に気付いたのか、彼女は顔をあげてこちらを見上げた。

その瞳を、私は正面から見た。

彼女の瞳は真っ黒だった。そこに光はなく、どこまでも深い闇がいくつも連なってそこに集まっているように思える。彼女の瞳から感情を感じることができなかったが、同時にその奥にある深い感情が私を捕らえに飛び出してくるのではないかという、曖昧な恐怖が

感じられる。私は目をそらした、そうしなければいけないと本能で感じたからだ。

これと同じ目を、先輩は現地でもっと多く見てきたというのか。その想像だけで、先輩が逃げ出したかったという表現を使った理由が理解できる。先輩は、女の子のことを同情するような目で見つめている。私が今感じた恐怖を、先輩ならば百パーセント完璧に説明できるだろう。

「この子は全てを知っている。あの場所の意味も、生まれた理由もと、先輩はいう。「色々、たいへんなこともあるだろう。だけどまあ、俺の安月給でも少しはマシな暮らしをさせてやれると思うよ」

先輩はそういつて笑うのであった。

家に帰って妻にその話をした。例の宗教との関わりの部分は省き、なるべく先輩の優しさを強調した美談になるような表現に努める。だが、妻の顔色はみるみる悪くなっていった。無理も無い。人身売買組織。奴隷商人。気分が良くなるはずもない。私は妻に話したことを後悔した。そもそも、私が仕事関連の話や先輩の話をしたこと自体が異例の事態だったのである。なぜ、今日に限ってこんな話をしてしまったのか。だがその理由も今ならば説明できるだろう。これもやはり、妻から感応したある予感が私に備わっていたからだというほかにない。

だからこそ、妻が次に言い出す言葉を、私は予想できていた気がする。

「あなた。私達も助けに行きましょう」

助けに行く。

こうして文字にしてみれば、なんともおこがましい感じがする。私は数ある映画や小説、漫画をみてきたし、その中には自分の家族なり恋人なり見知らぬ誰かなり地球なりを助けに行くような内容のものも数多くある。だが、それを自らの行動だと思って記してみれ

ば、こんなにもおこがましく、うそ臭い言葉はないように思える。なぜだろうか、自分自身のことだからであろうか。

そう、私は結果として、助けにいった。そして、恐らくは助け出した。だが、どうにも胸を張れるような気分じゃない。

助けに行く。妻がこの提案をした時、私は予測していたこともあり内心ではそれを受け入れつつも、一方でやはり聞き違いをしたのではないかと思った。

「なんだった?」

「私達も実際に北海道へ行くの。お父さん達に会うついでに、その施設へいきましようよ」

「簡単にいうけどね、分かってるのかい。相手は非合法で恐ろしい連中なんだよ。助けるだなんて、僕はブルース・ウィリスじゃないんだ」

「分かってるわよ。銃を振り回そうっていうんじゃないの。ただ、をふたり助けるだけ」

「ふたり? なぜふたりなんだ」

「経済的な問題」妻の顔は真剣そのものである。だが私はそういうことを聞いているのではない。何やら話がかみ合わない感じがするが、妻はその部分については軽く流した。「ねえ、私の体じゃは産めないわ。でも、は必要だと思わない?」

「そうかもしれないが……」

だからといって、それを奴隷商人から買うという手段が正しいのか? 結局のところ、私がこの提案を渋るその理由はそこにある。

連中に金を渡してを買う時点で、目的が助けることだろうがなんだろうが、共犯者にしかないのではないのか。

私のそんな疑問を打ち消さんとばかりに、妻はまくしたてる。

「例えそれでどんなしがらみがあろうと、ここで助けなければその子達は永遠に不幸の輪に閉じ込められたままなのよ。私はずっと待っていたわ。あなたと出会ったときから、誰かが私を呼ぶ声がずっと聞こえていたわ。毎日毎日、ずっと呼んでいる。でも、それが何

処から聞こえるのかわからなかった。ただ、その声の主がきっと私達になるんだってことは分かったの。だから、ずっと探してきたわ。そして今、あなたの話を聞いて全て理解したの。私達のは、その場所から呼んでいるのよ」

「そんなばかな」

喉が痛くなるほどにかすれた声で私は呟いた。正直に言って、恐怖を感じている。

「私もそう。サンタクロースに助けられたの。誰かが手を差し伸べなきゃ、を助けることなんて出来やしないのよ」

気おされた私は、私はただ頷くことで了解をするしか出来なかった。

そして頷きながら、小さな絶望を覚えている。まるで何かに操られているかのようだ。その何かとは妻のことだろうか。それとも、彼女が見る未来というもののことだろうか。もつとありていに言えば、それは運命のいたずらと呼べる類のものなのかもしれない。このノートを書いている今、その答えはいまだに分からない。いつの日にかこの文章を見る誰かがその答えを知っているかもしれない。だが、情けないことに――まったく情けないことに――私はいまでも恐怖を感じている。感じ続けている。

それからの妻はまさになりふり構わぬといった風で、少々気おされるほどであった。彼女は「をそこから買うとなれば金が必要だ」といい、そのための金策に走った。彼女はそれをまるで人生の目的そのものといわんがばかりに、毎日毎日、その話ばかりして過ごした。私は話を聞いているうちに些か疲れながらも、段々それが現実となるのだらうなというイメージが固まりつつあった。

先輩に施設の場所を聞くと、妻の実家があるE市からさほど遠くないことがわかった。妻もその辺のことは良く知っているそうで、普段はただの行楽地なのだそうである。日常のすぐ側に闇があると思うと、（あの瞳をもった少女のようなこどもたちが大勢いるので

ある) どうにも薄ら寒い感じがする。

北海道へ着くと、ひとまず彼女の実家へと向かう。レンタカーの中ではこんな会話をした。

「君は家に残れ。俺がひとりで行く」

「だめよそんなの。二人のこどもなのよ。二人で決めるのが筋つてものだわ」

「……生まれてくるこどもがどんなのかなんて、生まれるまで分からないだろ。二人で選ぶ必要は無い。君を行かせたくはないんだ。わかるだろ」

「いやよ」

お互い譲らないまま、私達は一時間半かけてE市へ着いた。

妻の両親は私達を歓迎してくれた。クリスマスらしく、七面鳥を焼いてもてなしてくれる。きっと酒を勧められるだろうと思っていたのだが、グラスに注がれたのは専らオレンジジュースであった。

この後運転があるので、勧められても断るつもりだったが、その手間は省けた。だが些かそれは不自然なことに思えた。義父は普通にビールを飲んでいたのである。後で思い返しても、妻の両親には驚かされっぱなしである。先に言ってしまうが、要するに両親は、私がこの後やろうとしていたことに気付いていたのである。私は些か不思議に思いつつも、まさか義父と義母が気付いているとは夢にも思わなかった。ところが、義父と義母はそれどころか、妻のジュースに睡眠薬を入れるという離れ業までやってのけていた。私がそれを知ったのは、一応の決着がついた後でのことである。

そうとも知らず、私は真夜中になると妻が深い眠りにについているのを確認し、こっそりと庭に停めてあるレンタカーへと向かった。

北海道の寒い冬だ。エンジンが温まるには少し時間がかかる。窓には雪が積もっていて、これを振り下ろさなければならぬ。こうしている間にも妻が気付いて追いかけてくるかも知れないと思うと、気が気ではなかった。起きてきたらどうしようか、やはり一緒に行くべきなのかもしれない。だけど、私はどうしても行かせたくはな

い。もつと言え、私だって行きたくはない。手がかじかんで来た。心まで一緒にかじかんでいる気分になる。

そのとき玄関の戸が開く音がして、私は驚き振り返った。やはり妻に隠し事はできないか、一瞬そう思ったが、吹雪の中にぼんやりと浮かぶその姿は、妻のものではなかった。

「どこへいくのかね」

義父の声がする。吹雪にまみれ、その姿は影でしか見えない。だがその影には吹雪などものともしないと云わんがばかりの強固な輪郭があるように感じられた。

「おはようございます」

私は動揺と、この寒さと両方の原因で、声が震えた。そのうえで出てきたのがただの挨拶なのだから間抜けなものである。

「まだ夜中だよ」義父は小さく笑いながらいった。いいながら、彼は段々と近づいてくる。「記者さんってのはあれかい、やっぱり不規則な生活なのかね」

「まあ、そうかもしれません」

「で、どこへ行くのかね」

「それは」私は言い訳を考えてみたが、頭が凍りつきでもしたのか、うまく考えることすらできない。

義父はその姿がはっきりと見える距離にまで近づいてきた。

その顔には皺はなく、鋭く何もかもを見抜いてしまいそうな目つきをしていた。義父の年齢は七十を過ぎていると聞いている。私の妻を引き取った時点でもう六十過ぎ。彼女のことを孫と呼んでもいいくらい年齢は離れている。しかしその瞳に宿っているのは老人らしからぬギラギラした輝きだった。そして彼はこれから私がやろうとしていることに気付いている。あの娘にしてこの父ありということだ。ただし、妻は予知能力で全てを看破し、義父は勘と経験でそれをやってのけてしまうという違いがある。

「を助けにいくのか？」

義父は、今日の夕飯を母親に聞くのと同じくらいになんでもな

い調子で、そう言った。

「なぜ」としか私にはいえない。

「今日はクリスマスの夜だからな」と義父は低く笑う。「そういうサンタクロース気取りが一人や二人、世界の何処かにはいるもんだ。娘の過去については当然知っているね」

私は頷いた。

「エンジンが温まるにはまだ時間がかかるかね」

「ええ、多分」

「それならまあ、時間の無駄にはなるまいよ。十数年前の話を少しくらい君にしたところだね」

義父がこれから何を話始めるのかは私には分からなかったが、私は改めて強く、どうか妻が起きてこないようにと願っていた。なぜだか今日の晚餐で食べた七面鳥のことを思い出した。クリスマスだということで、義母と妻は協力して豪華な料理を作ってくれた。メリークリスマス。歌が聞こえてきそうだ。だが、聞こえてくるのは吹雪の音、エンジンの音、そして義父の声だけに決まっている。

「あの時も、酔狂なサンタクロースが娘を助け出した。病院のベッドで目が覚めた娘が――その頃はまだ娘じゃなかったがね――起き抜けに言ったのがこれだ。」

『サンタさん、来てくれてありがとう』

無論、彼女の枕元には靴下なんか置かれていなかったし、プレゼントも無かった。クリスマスはどうに過ぎて、もう二十八日だったのを覚えているよ。私達夫婦は彼女が入院した時から定期的に見舞いに訪れていた。この子が目覚めたら、娘として引き取ろうと決めていたんだ。だから、彼女が目覚めた時は素直に嬉しかったね。だが、彼女はそんなことよりも、サンタクロースのことが気になって仕方ないらしい。

正式に娘として引き取ってから、娘はことあるごとにサンタクロースについて私達に尋ねてきた。私達はこう答えた。『いい子にしてたから、サンタさんが来てくれたんだねえ』ってね。だけど、

これは些か妙な受け答えだ。娘が私達に聞いてきたのは、サンタさんは本当にいるのだとか、サンタさんまた来てくれるかなあだとか、そういうらしいものじゃない。

『あのサンタさんは誰なの？ どこへいったの？』

それがどういふことか分かるかな。つまり娘自身はそれが本物のサンタクロースではないことを知っているという理屈になる。だけど、問題はそこじゃない。娘はもっと深く知っていた。つまり、私達夫婦がああサンタクロースの正体を知っていると確信していたっというわけだ。

正解。その通り。私達はああサンタクロースの正体を知っている。そもそも、娘を救い出すように彼に指示をだしたのが私だからね。

君も知っての通り、ああ宗教団体のやっていることは人道に反している。幼児虐待、性的暴行、人格破壊、殺人、それら忌々しい行為の全て、あそこでは戒律などというくだらない制度で許されている。クリスマスの夜もそうだ。あそこにいる達は七面鳥を食べることもなく、普段どおりの暴行を受けている。……ならば、ちよっとくらいサンタクロースの訪問があつたっていいだろ？

もつとも、娘がなぜあれをサンタクロースと思い込んだのかは分からないがね。そんな変装をさせた覚えは無いからな。だが結果として彼は見事にそれをやったのけてくれた。彼はたった一人だったのに。優秀な男だったよ。娘を救い出したし……他にも何人かのをああ場から助け出した。

サンタクロースは確かにいたのさ。ああ夜、ああ場所に、達のためだけにね。

クリスマスの夜は達にこそ幸せを与えるべきだ。違うかね？ 君もそう思っているからこそ、行くのだろうか？」

そろそろエンジンが温まったころだ。いつでも出発できる。私は窓の雪を払い落とすと、義父にこう聞いた。

「そのサンタクロースというのは結局誰だったんですか？」

「想像はつくんじゃないか？」

義父はそれ以上何も言わず、ただ彼の目だけが私に語りかけていた。

車に乗り込み発進させる。目線だけで見送る義父に目礼を返した。「養子をとろうと思っています」晚餐の時に私がそう告げると、両親はとても喜んでくれた。勿論、どこから引き取るかということは一言もいっていない。だが、義父はおそらくその時から気付いていたのだろう。私のほうは、義父が何を考えているかにまるで気付かなかった。妻はどうなのだろう。みんなが何かに気付いている。私などよりもずっと先を見ている。私だけが何も見えていないような気分になる。だがそのくせに、ひとりきりで得体の知れない場所へ足を踏み入れようとしているのだ。私は不安でたまらなかった。真夜中の闇の中、ヘッドライトだけを頼りに走っている。窓に叩きつけられる吹雪で、視界は尚更悪くなっている。注意を少しでも怠れば、その瞬間に事故にあってしまいそうだ。目的地までは一時間半ほどだ。先輩の話によると、何しろ非合法な組織なので真夜中に訪ねるのが一番いいらしいということだった。視界も悪いし路面も凍っているが、なんとか夜が明ける前には到着することが出来るだろう。途中、赤信号で停車すると、道端に大きなクリスマスツリーが見えた。申し訳程度の装飾をさせて光っているものの、吹雪のせいでそれはとても弱く見える。今ごろ、世界中の達の元にサンタクロースが訪れていることだろう。ソリとトナカイだけの装備で吹雪の中、家々を廻るサンタクロースを想像すると同情したい気持ちになる。屋根のついたレンタカーで暖房も完備されている身分としては、贅沢も言っていられないだろう。ラジオからは、さっきからクリスマスソングが立て続けに流れている。知っている曲、知らない曲、好きな曲、嫌いな曲。だがどの曲も共通して、クリスマスを否定していない。サンタクロースを否定していない。おそろく……おそろくだが、その瞬間にクリスマスやサンタクロースを否定していたのはその街の中でも私だけなのではないかと思う。だが、なぜ否定していたのかも、これを書いている今となってははっきりしない。

私はただ、車中で、クリスマスムードを全身に感じていたことだけを覚えている。それだけしか覚えていないのだ。

目的地は山奥にあった。冬の山奥など、どういう神経なら立ち入る気持ちになるというのだろう。私はそれが理解できないまま、車を走らせる。除雪はきちんとされていた。ある程度いくと、ひとつの建物が見えてきた。二階建ての地味な建物だ。一見すると廃墟のようだが、先輩に写真で見せられた外観と一致している。先輩はこの場所のことを記事にしなかった。その時はなぜだろうと思ったのだが、多分あの子を引き取ったことにそれは関係しているのだと思う。

車を止め、敷地内へ足を踏み入れる。車を降りると、足元でざくりと音がする。雪を踏みしめる音だ。足跡は私以外のものではなく、人の姿も見えやしない。一階の窓から、か細い光が漏れているのみだ。窓の中から人の頭が見え、どうやら男がこちらを見ているようであった。私は引き返したくなった。だが、足跡はもうつけてしまった。

玄関の上に石造りの看板がかけられている。

『神裁館』

大袈裟な名前だ。なんと読むのかは、未だにわからない。

ガラスの扉を開け中に入ると、背の低い初老の男が立っていた。窓から見えていた男だ。彼は腕を後ろに組み、白衣を着ている。頭髪はオールバックで、禿げかかっていた。でかいふち無しめがねに細目という顔が、神経質そうな雰囲気を漂わせている。

「こんな夜更けに、よくいらっしゃいました」声質は甲高く、どこか面白がっている風だった。「ご予約のお名前は？」

私は名前を告げると（念のために偽名を名乗った）、雪塗れの靴をスリッパに履き替えた。男は私を、「待合室」と表記された部屋へと案内する。この館全体にいえることだが、無機質で人の気配がない場所だ。装飾なども一切なく、ただ机とソファがあるばかり。男は緑茶を用意してくれたが、とても飲みたい気分にはならない。

まるで毒のように思えて仕方がなかった。

「奥へお通しするまえに注意ですが」

正面に座った男は、真っ直ぐに私の目を見据えながらそういう。

「この場所のことは、ご存知で？」

「はい」

「誰に聞きましたか？」

「職場の先輩に」

「その方のお名前を聞いても？」

私は先輩の名前を告げた（それも偽名だったが、先輩は予めそれを私に教えてくれていた）。男は何かのファイルを取りだし、それに目を通す。

「はいはい、顧客リストの中に名前がありますね。この方でしたら、信用できますな。この方がお買い上げになった商品、ご覧になられましたか？」

私は先輩が連れていた可愛らしい女の子の顔を思い浮かべながら頷いた。頷きながら、この男にとっては、あの少女は商品にすぎないのだと思った。これを先輩が聞いたら怒るだろう。自分の娘を商品扱いなどされたと知れば。

「どう思われましたかな。参考までに」

あの少女に関して言えば、あの憎しみに満ちた暗い目つきを思い出すばかりである。そして彼女がそうなった原因の一端がこの男にあるのは明白だ。この男の目つきはといえば、あの少女の憎悪にもこれからにもまるで無関心といった風である。この時の私の目つきはどうなっていただろう。怒りに充ちていただろうか。だが、もしそうだとすると、私はそれを隠し通さねばならない。

「ええ、可愛らしい子でしたね」

「……左様ですか」

男はファイルをぱたんと音を立てて閉じると、改めて私の目を見つめた。

「私の背後にある扉、見えますね。あの向こうには、まず新生児室

があります。勿論ガラスで区切られた無菌状態ですが、そこから様子をみることも可能です。もしそこで気に入るようでしたら赤ん坊を差し上げても構いませんがね。まあ当然、何の能力もございません。学習などしていませんからね。

その奥からが重要です。私どもが一流の教育をして育て上げた、優秀な達があります。教育の内容について、ここで説明しても構いませんが、まあ実際に見ていただくのが一番はやいでしょうな。なんでしたら、体験してみても結構ですが……ところで、失礼ですがご予算は？」

私は手持ちの金額を簡潔に伝える。金策については、前述したとおり妻が主に奔走した。あまり言うべきではないのだろうが、妻は予知能力を用いてギャンブルに必要な分だけ金を儲けた。「卑怯じゃないかと思うでしょ」と妻は言った。「でも、これは達を助けるために必要だわ。私達が卑怯だというのなら、ギャンブルよりなにより、もっともっと最初からずっと卑怯なのよ」最初からとはどういうことだい？ と私が聞くと、「それは最後には分かるわ」と妻がいった。「でも、私達はもう道を敷いてしまったんだわ」

「結構です。では早速、どうぞこちらへ」

男は立ち上がり、促すように手を広げた。握りつぶすも掴み取るも可能な悪魔の掌だ。私も立ち上がり、奥の扉をにらみつけた。あれは真実の扉、禁断の扉、様々な思いが頭の中を駆け巡る。吹雪が窓を激しく叩き付ける。帰り道を絶たれたような気分がした。

扉の向こうからふわっと冷たい風が流れ込んだ。一瞬屋外へ出たのではないかと錯覚するほどの寒気であったが、そこにあるのは薄緑色をした廊下である。壁の片側はガラス張りになっていて、その奥には何かの医療機器とガラスケースが見える。廊下はさほど長いものではない。蛍光灯の灯りは弱々しく、細かい明滅を繰り返していた。

廊下の一番奥には両開きの白い扉。

「あの奥です」

男が背後から私に声をかける。その吐息が後頭部に吹きかかったような感じがして不快だった。寒さのせいで彼も私も息が白くなっている。ガラスに近づくと、二つのケースの中にそれぞれ生後間もないであろう赤ん坊の姿があった。両方とも男の子で、チューブにまみれながら良く眠っているようだった。生まれたてのその姿に邪気は無い。だが、素直に彼らを可愛いと思えるような心境とはとてもいえなかった。

「この寒さの中で、赤ん坊は大丈夫なのですか」息を白くしながら私が問うと、「あの中は暖かいものですよ。我々も赤ん坊には優しくするのでね」と男は言う。別々のケースで眠る二人の赤ん坊は静かに眠っていたが、その姿はどこか窮屈そうだ。このままいけば、この子達の身の上にもこれから苦難が押し寄せるのだ。これ以上の耐え難い窮屈が。

赤ん坊から目を離せない私を尻目に、男はさっさと先へ行こうとした。私の視線が男を追う。あの白い扉の向こうに何が待っているのか、私は想像してしまう。

男がとうとう扉に手をかけたとき、

「この子たちにします」

考えるより先に私は声にしてその答えを出していた。

キィ、と男の手は扉を開きかけ、そしてそのまま止まった。首だけをこちらに向け、怪訝そうな顔をする。

「お早い決断は尊敬に値しますがね、まだ奥にいけば選り取りみどりですよ」

「この子たちにします」

「その子たちもまあ、確かにある程度優秀な遺伝子は持っています。我々の肝はその教育にあるのです。流石に生まれたての赤ん坊に教育を施すことは出来ませんがね。いわば、それはまだ出荷前の段階です。いいんですか？ 奥にいる達、きつとあなたを満足させてくれるというのに」

だが、そんな言葉はただ煩わしいだけだ。私のいまの望みはひと

つしかない。

わかったから早くその扉を閉めてくれ。ほんの僅かに隙間が開いているのもう我慢できない。頼む、わかってくれ。

「この子達にします」

「ま、いいでしょう」

男は扉から手を離し、私に向き直った。キィ、と音が鳴り扉は完全に閉まった。私は息をついた。白い吐息が舞う。

再び、赤ん坊に向き合う。

その子達が、私の二人の息子となる。

男は億劫そうに踵を返し、私の隣に立った。赤ん坊を見る目が、つまらない玩具に飽きたようなものに見えた。多分、彼にとっての楽しい玩具がお預けされたのが気に入らないのだろう。

「本当にいいんですね？」

「かまいません」

男はこれ見よがしに大きなため息をつく、私に向き直った。

「あなた、恐ろしい人ですね。流石の私でも、赤ん坊は選べませんよ」

私達は応接間へ戻ると簡単な手続きを終え、書類にいくつかの情報を記入する。この瞬間、私は犯罪者としての証拠を残したということになる。どんな目的であれ、人身売買に加担したことは事実である。私は金を払い、その金は組織の肥やしになり、また新しい不幸な達が生まれる。本当にこれで正しいのか？ 私はそれを自問した。自問しながら、書類に記入をした。

そうすることによって、私は新しい家族と罪を同時に手に入れた。この事実永遠に隠し通さねばならないだろう。特に、この子達には。

永遠に。

私は達を車の助手席に乗せ、寒くないように毛布をかけてやった。エンジンをかけて暖房をたく。ふと『神裁館』をみやると、そこは

巨大な幽霊屋敷のように見える。つい先ほどまで私はそこに居り、そして生還した。二人をつれて。あの中では、甲高い声の男や、まだ見ぬ達が今も暮らしているはずである。これを書いている今もなお。

私が家に戻る頃には既に夜が明けていた。世間の達は今頃きつと、サンタクロースがくれたプレゼントの包み紙を喜んで開けているに違いない。テレビゲームかぬいぐるみか、私が彼らに望むのは喜びの笑顔だけだ。

妻はといえば、悲痛な顔で泣いていた。勝手に抜け出していった私を一度は責めた。実際、彼女に気付かれなかったのは奇跡のようなものに見える。彼女の予知を使えば、私が抜け出すことなど簡単に見抜けそうなものである。

義父は後になって、妻のジュースに睡眠薬をいれたことを認めた。「あの場所はよくない。娘のような感性をもつものには特にね。君だって、そうだからこそ、この子達を選んだのだろうか？」私は義父にすら恐怖を禁じえなかったが、それもまた済んだことだ。

赤ん坊を見て、妻はまた更に泣いた。彼らを優しく抱きしめると、達は目を覚まし、赤ん坊らしく「おぎゃあ」と泣いた。それが初めて聞いた彼らの声だ。

私達夫婦の息子。

間違はなく、彼らはそうなのだ。

……迷ったが、やはり書いておくべきだ。

私がなぜこの二人を選んだのかを。

理由はごく簡単で、罪深い。ただ単純に私は怖かったのだ。

あれ以上奥へと進んで、また別の達を見るのが怖かった。二人を見たときに、感じたのだ。もし、ここで私がこの子達を選ばなければ、凶悪な不幸が彼らの上に降りかかるだろう。この子達はまだ赤ん坊で、何も知らない。いま、こうして肉眼でその姿を見てしまつては、私は最早、この子達を見捨てることが出来ない。

だが、それだけではない。

もっと奥へ進んでいくと、私はどうなってしまうだろうか？

向こうにはもっと多くの達がいる。その多くは、彼らの言うところの『教育』が既に施されているだろう。扉一枚隔てた向こうに、そういう現実を過ごしてきた達が大勢いるのだ。

私は、そんな彼らを直視できるのか？

先輩が連れていた女の子と同じ目をした達は何人もいるのに？

正直に告白しよう。

二人の赤ん坊を見たときに私が感じたのは、結局のところ恐怖でしかない。それまでは、あくまで想像にすぎなかった不幸な達の姿が、現実として目の前にあった。その時、私はそのさらに奥に存在しているであろうその罪深き空間から流れてくるおぞましいオーラを確実に感じ取っていた。妻のように、予知能力などもたない私だ。いままでどんなオカルト取材にいつても、幽霊ひとつ見なかった私だ。扉一枚隔てた奥にいるであろう、運命を縛られた達の発する何かのオーラを、気が狂いそうになるほどの力で全身に浴びてしまったのだ。

あの男が開きかけた白い扉のほんの小さな隙間から、それは手を伸ばしていた。私には、はっきりとそれが見えた気がしたのだ。

駄目だと思った。それ以上、立ち向かえないと思った。救うなど、思い上がりだと思った。私は、目の前にいた二人のに、逆に救いを求めてしまった。この子達を連れ出して、さっさとここから逃げなくてはと思った。もしも奥にいる達を見てしまえば、とても私には背負いきれなかっただろう。かといって、逃げ出すこともできなかっただろう。ただ囚われ、とり憑かれるだけだっただろう。立ち向かえない恐怖がそこにいたのだ。姿は見えずとも感じたのだ。私はそれ以上足が動かなくなった。

その正体は、私が救うなどと息巻いていた達だということも理解できていたはずなのに。

だから、私と妻は、家に帰ってから泣いた。

私は、誰かにとってのサンタクロースになれなかった。

これが事の顛末である。私は永遠に忘れられないだろう。姿なき達の姿を。

私は許されることなどないと思う。

今は、達の名前を考えている。夫婦で相談しあって見ると、どうにもお互いセンスがまるで違う。それが可笑しかったので、私達は笑いあったりもした。心から安らいだ笑いではなかったかも知れないが。名前はまだ決まっていらない。もしも決まっても、このノートには記さないつもりである。

これから先、私達がすべきことはただひとつ、この子達を幸せにするということだ。切り捨てた達の事は、この胸に確かに刻まれた。このノートはその証である。その業は背負う。だが私の達に伝えるものではない。私は罪の確認のためにこのノートを記し、未来の幸福のためにこのノートを手放すことにする。

「この一連のことを自分のためにノートに記そうと思うんです」

妻の実家から、東京の先輩に電話でそう告げた。

「書きあがったら俺にも見せてくれないか」と先輩は言った。

私は少し迷ったが、「わかりました」と答えた。

私達は同じ罪を共有している同士――いや、先輩はもっと奥まで踏み込んだので、逃げ出した私とは全く違うのだが――このノートを共有の罪の証として保持することを決めた。私はこのノートを先輩に託すことを約束した。私が記し、先輩が所有する。

「うちの娘は全ての事情を知っているし、お前んちに置いてあるよりいいだろ。俺達は俺達で乗り越える。だから、お前はお前でやっていけ」

先輩はあの雑誌のライターをやめ、新しい仕事を探すことにすると言った。何処か遠くへ引っ越すのだそうだ。東京へ戻ってこのノートを渡した後は、もう二度と会うことは無いかもしれない。私達を繋ぐのは、この一冊のノートだけになるというのだから奇妙な気

分だ。

「メリークリスマス、アンドハッピーニューイヤー」

先輩はジョン・レノンのあの歌の調子でそう言うと言った。電話を切った。私はもうすぐ、このノートを閉め括るつもりだ。その後は、とうとう達の名前が決まる。今、わたし達家族はまだ妻の実家にいて、このままここで年を越すつもりだ。妻の両親も一丸になり名前を考えてくれているし、多分二つくらいはいい案がでてくるだろう。

名前が決まったあと、彼らは仲の良い兄弟になってくれるだろうか。心優しい子に育ってくれるだろうか。犯罪に巻き込まれたりしないだろうか。それらは全て将来への不安だが、同時に希望でもあるはずだ。

< 了 >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5885p/>

ある子ども達のためのサンタクロース

2010年12月19日15時10分発行